

**注意！**

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

# 農作物技術情報 第4号 花き

発行日 平成24年 6月28日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどう 褐斑病、リンドウホソハマキなどの病害虫防除を徹底しましょう
- ◆ 小ぎく 白さび病、ハダニなどの病害虫防除を徹底しましょう  
収穫前に次年度用の健全な親株を選抜しましょう
- ◆ 共通 ほ場乾燥が続く場合は早めにかん水しましょう  
圃場の排水対策を実施し、湿害を回避しましょう  
切り前・選別基準の遵守により、揃った品質で出荷しましょう

## りんどう

### 1 生育概況

露地りんどうの生育は概ね平年並みとなっています。県南部では極早生品種の開花が6月中旬から始まっています。リンドウホソハマキは成虫の発生がダラダラと続いているので、継続して防除が必要です。また、葉枯病の発生がみられています。

### 2 圃場管理

#### (1) 株養成

定植後の乾燥は、苗の生育に大きく影響します。干天が続く場合は必ずかん水し、圃場の状態によってはうね間かん水を実施します。また、定植1年目に葉枯病やリンドウホソハマキが発生すると翌年の株落ちの原因となります。採花圃場と同様に病害虫防除を徹底します。

#### (2) ネット上げ

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるように、こまめに上げて茎の曲がりの発生を防ぎます。また、ネットに葉が引っ掛かり曲がることも多いので、随時圃場を見回り、修正してください。

#### (3) かん水・排水対策

大雨が予想される場合、水路などからの水の流入を防止するとともに、排水路の点検を行うなど排水対策を講じてください。また、反対に雨が少なく乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等にかん水します。

#### (4) 収穫・調製・出荷

##### ア 収穫

収穫は頂部の蕾が膨らみ色づいた頃が標準です。ただし、出荷先やバケットなどの輸送形態等により早めの収穫とする場合もありますので、事前に確認し仕向け先に合わせた切り前とします。

収穫は日中の高温となる時間帯を避け、涼しい朝夕に行います。やむを得ず日中採花する場合は、収穫後直射日光に当たらないようにし、速やかに日陰に運び水揚げを行います。

株の消耗を防ぐため、必ず3本程度の茎を残し、残った茎は残花部を折り取って種子が作られることによる消耗を防ぎます。また、残花部の折り取りはアザミウマ類やアブラムシ類の被害軽減にも効果的です。

## イ 乾燥

雨天時に収穫した場合や朝露がついている場合は、扇風機や切り花乾燥機を用いて必ず乾燥させます。濡れたまま結束したり箱詰めしたりすると輸送中の蒸れなどによる品質低下の原因となります。

水を切るため逆さにして振ることは、茎が折れることに加え、花の蜜が花卉や葉などに付着して品質低下の原因となる場合があるので極力避けます。

## ウ 選別

花段数、長さ、太さ、曲がりなどを基準に選別します。出荷規格を遵守し、信頼を落とさないようにします。病虫害の被害があるものは出荷しないことを基本とします。

また、暗い作業場での選別作業は病虫害痕の見落としなど品質の低下につながることで、作業者の目が疲れ作業性の低下や疲労が増大することとなります。りんどうの選別は花段数の確認等で目を酷使していますので、作業場全体と選別を行う作業台の明るさを十分確保します。

## エ 調製・水揚げ

選別調製後、規格別に 10 本束にして水揚げを行います。

束とする 10 本の切り前や品質が揃うよう留意します。水揚げが長時間になると輸送中に蒸れることがあるので、極端に長い時間（24 時間以上）の水揚げは控えます。

## オ 箱詰め

各部会等で決められた方法で箱詰めを行います。輸送中に花束が動いて傷むことがないように確実に固定します。

## (5) 病虫害防除

### ア 葉枯病

これまでのところ下位葉部分に発生が見られていますが、降雨により急激に増加し、中上位葉まで発生することがあります。定期的に薬剤散布し発生を予防します。薬剤散布は降雨前に行うことが理想ですので、気象情報を確認しながら効果的な防除を行います。

### イ 褐斑病

7 月下旬まで重点的な防除を継続します。発生してからでは薬剤の効果が高いので予防散布に努めます。

早生種では収穫時期が近いので、葉の汚れに注意し、ダコニール 1000+展着剤または、ストロビーフロアブルを使用します。葉枯病との同時防除とする場合はダコニール 1000 を選択します。



写真1 褐斑病

### ウ ハダニ類

今のところ発生量は少なめですが、高温・乾燥により発生が多くなりますので、発生密度が高くなる前に薬剤散布を行ってください。薬剤散布は散布量を十分に、葉の裏側を洗うように散布すると散布むらも無くなり効果が高まります。

なお、ダニ剤の使用においては同系薬剤の 1 年 1 回使用を基本に、抵抗性の発現を避けてください。

### エ リンドウホソハマキ

昨年、大発生した圃場では要注意害虫です。県中南部では 5 月下旬から成虫の発生や産卵が確認され、6 月中旬以降、頂部の食害や茎への食入が増えてきています。また、県北部や積雪の多い地域でも 6 月初めには成虫の発生が確認されています。発生ピークが判然とせずダラダラと発生が続いていますので薬剤散布を継続し防除してください。

また、第 2 世代の発生が 7 月中～下旬に予想されます。被害が散見される圃場では、圃場をよく観察して被害茎を折り取り処分するなど防除を徹底してください。



写真2  
ホソハマキの頂部食害



写真3  
ホソハマキの茎への潜入痕

## オ アザミウマ類

蕾がふくらみ着色が始まる頃から蕾に侵入し、花卉を吸汁する被害が見られます。蕾の中に入ると薬剤がかからず、大量に増殖して被害が大きくなりますので、侵入を防ぐよう寄生前の予防に努めます。

アザミウマ類は雑草を含むあらゆる植物に寄生するので、周辺の作物の防除、雑草の処理を必ず行ってください。また、着蕾期前にシルバーの反射テープを支柱上部に張ることで、アザミウマの発生が大幅に減らすことが可能な現地事例があります。さらに、残花茎でのアザミウマの増殖を抑えるために、収穫が終わった圃場の残花茎は全て折り取り処分します。

## 小ぎく

### 1 生育概況

4月の低温、天候不順により定植に若干の遅れがみられましたが、生育は概ね平年並みとなっています。白さび病の発生がやや多く、ナモグリバエ、キクスイカミキリ等による害虫の被害がみられています。

### 2 圃場管理

#### (1) かん水

雨が少なく圃場が乾燥すると側枝の伸長不良や開花遅れの原因となるので、極度に乾燥する前にかん水します。一方でりんどうと同様に長雨や集中豪雨に備えて排水対策を講じます。

#### (2) 整枝

側枝が20～30cmに達した頃に株あたり生育の揃った側枝が3本程度が残るように整理します。

#### (3) 下葉取り

蕾が見える頃になったら、地際から20cm程度の葉を掻き落とし、通風をよくすることで、病害発生抑制、収穫作業の効率化をはかります。

#### (4) 収穫・調製

りんどうと同様に、切り前や作業時の環境に留意して収穫・調製を行います。

小ぎくでは、花卉が着色して爪立ちとなった頃が収穫適期となりますが、出荷時期や出荷先、品種によって異なる場合もあるので、仕向け先にあわせた適正な切り前を確認し調製します。

#### (5) 病虫害防除

白さび病、ナモグリバエ、ハダニ類、アザミウマ類の発生が確認されています。発生前の予防、発生初期の防除を心がけてください。

ミカンキイロアザミウマ等が媒介するキクえそ病(TSWVによる)などのウイルス病が見られるので、アザミウマ類等の害虫防除を徹底します。圃場内外の雑草が各種害虫の増殖源となるので、雑草防除も必ず行ってください。

#### (6) 病害株の抜き取り

キクに発生するわい化病(キクわい化ウイロイド)、キクえそ病(TSWV)、半身萎ちょう病に

感染した株は薬剤散布などで治療ができないことから、見つけしだい抜き捨て、圃場内に残さないことを徹底します。

感染株を残すことで健全株への感染が広がるほか、感染株を親株とすることで翌年の発生が拡大する原因となります。

### 3 親株の選抜

次年度用の採穂に使用する親株は、収穫後では形質や病害の感染が確認できないので、収穫が始まる前に次の点に留意して親株の選抜を行い、目印を付けておき、収穫後に親株とします。

- (1) 草丈が十分に伸び、草姿が優れる
- (2) 開花期が目的の時期に合う
- (3) 病虫害（特にウイルス、ウイロイド、半身萎ちょう病）に侵されていない
- (4) 株の生育・充実状態が揃っている

なお、わい化病やキクえそ病に感染した株や、発生株周辺の感染の恐れがある株は必ず抜き捨てて圃場に残さないことが被害拡大防止の基本です。

## 施設花き

### 1 トルコギキョウ

生育に応じてかん水を控えて締まった草姿を目指します。また施設の温度、肥培などの管理を適正に行い、生育量確保を図るとともに、生育障害発生を抑制します。

### 2 アルストロメリア

秋の開花を充実するためには夏季は収穫を休み、株充実のため花蕾摘除、葉芽・枯れ茎の整理を行います。品種によって量は異なりますが、夏季は肥料・かん水が過剰にならないよう少なめに管理し、地温を下げるために、遮光や地冷を行います。

また、株養成中にオンシツコナジラミが発生することがあるので、適宜防除を行います。

### 3 ユリ類

抑制作型では遮光を行って地温低下を図りますが、梅雨期等日照が少ない時期はできるだけ日照を確保するよう遮光率の低いものに換えたり、遮光資材をはずしたりすることも必要です。

### 4 ストック

7月下旬が無加温作型の播種期です。育苗管理では、施設の気温上昇を抑制すること、苗の生育を揃えるため均一で適切な水分状態を保つことがポイントです。

気温上昇抑制のためには施設を遮光資材で覆うほか、育苗箱を直管やブロックなどで作ったベンチなどに置き、風通しをよくすることや、周辺に散水することなども有効です。ただし遮光資材は育苗後半や曇天時には、除去して徒長を防ぎます。

かん水は、一時に多量にかん水すると胚軸の徒長を招くので、少量ずつ回数多く行います。

八重鑑別は播種後3～5日の発芽揃い時、子葉展開時、定植直前の3回に分けて行います。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は  
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう